

蔭山淳「米西岸の桜が育てた縁——バンクーバー市に 100 本寄贈、VTR 生産成功の恩返し」  
『日本経済新聞』2016/04/20 朝刊

米ワシントン州バンクーバー市にある短大クラークカレッジで 21 日、桜祭りが開かれる。キャンパスに咲き誇る 100 本の白普賢（しろふげん）桜の下、和太鼓が鳴り響き、市民らが日米の友情を祝う。今年で 10 周年。桜は 26 年前、私が私財を投じて贈ったものだ。

琴の演奏や茶道の実演が日本情緒を醸しだし、祭りの雰囲気盛り上げる。勇壮な和太鼓の演奏グループは隣接するオレゴン州ポートランド市から参加してくれている。

1990 年、私は松下寿電子工業（現パナソニックヘルスケア）の米国法人社長としてバンクーバーに赴任中だった。VTR の現地生産が軌道に乗り始め「何か地元之恩返しを」と考えた。日本の象徴といえば桜。ちょうどワシントン州が州に昇格して 100 周年を迎えた折でもあり、100 本の桜を贈ることにした。

○ ○ ○

日本からたる酒持参

土の付いた植物の輸入は禁止されているため、地元の苗木店で購入した。「綺麗な花が咲く強い木を」と頼むと、白普賢桜を薦められた。

4 月の植樹式には州知事や市長をはじめ大勢の市民が参加。市は桜に 1 本ずつ番号をふり、市民に割り当てた。参加者はシャベルの番号と桜の番号を照らし合わせ「私の桜はこれだ」と大喜び。

桜祭りは市と短大が協力し、2006 年に始まった。既に帰国していた私もゲストに招かれる。案内状に「キーノート・スピーカー」（主賓）とあり驚いた。日本から持参したお祝いのたる酒は国際線では無事だったが、米国内を小型機で移動する間に割れてしまい、参加者には酒の匂いだけをかいでもらった。

○ ○ ○

きっかけは倉庫の紹介

以来、毎回のように訪れる。最初は桜が日本で好まれる理由などをあいさつで披露したが、数年で話の種が尽きてしまった。スピーチのため自宅近くの図書館に通い、桜に関する書籍を読みあさった。最近、京都府立植物園の名誉園長さんから貴重な情報を得ている。

米国との縁は学生時代に遡る。同志社大の「ESS」で英語の習得に励むも肺結核にかかり、3 年間の入院と 1 年のリハビリを余儀なくされた。大学院に進み、成績は「全優」を取ったものの既往症のため就職先が見つからない。指導教授の助言で 55 年、フルブライト奨学生として米オレゴン大大学院に留学した。

ニューヨーク大大学院での研究をはさみ、58 年に経営学修士号 (MBA) を取得して帰国。松下電器貿易（現パナソニック）に就職した。80 年代半ばに松下寿の米国現法社長を拝命。日本製品の米国向け輸出が急増し、日米関係が悪化していた頃だ。松下寿社長で松下電器産業（同）副社長でもあった稲井隆義さんの命で、輸入規制を回避するため、現地生産の可能性を探った。

○ ○ ○

## 採用に応募者殺到

その時バンクーバーにあった食品メーカーのデルモンテの倉庫を工場にと紹介されたのが後の桜祭りに続く縁の始まりだった。当時は失業率が高く、250人の採用枠に1200人が応募してきた。面接や待機の場所の確保に頭を悩ませた。

市長に相談すると、クラークカレッジに伴われ「問題は市役所と短大が解決するから、満足できる人を選びなさい」。市が書類審査で500人程度に絞った。短大は、プレスや塗装の工程を担当する採用者に基礎教育を施してくれた。

92年、稲井さんが急逝し、私も現法社長を退く。その後はオレゴン大で客員研究員として92～97年に異文化経営論を教え、日本人として初の理事を務めた。大阪府枚方市に暮らし、卒寿を迎えた今もオレゴン大の教員や学生とはメール、電話を欠かさない。むろんバンクーバーの人々ともだ。

100本もの桜を維持する人々の努力には頭が下がる。私は保護活動に寄付を続け、クラークカレッジで学ぶ日本人向けに少々の奨学金を提供してきた。皆が「桜のおかげで街が生き生きして立派になった」と言ってくれるのが私の誇りだ。明日の桜祭りではどんなあいさつをしようか。 (かげやま・あつし=元アメリカ・コトブキ・エレクトロニクス社長)